

〈対話〉は何のために

風土学は〈出会い〉と〈対話〉の哲学。なぜ、何のために対話するのか。今日までの〈対話〉の実践を振り返り、「哲学対話」の具体的なモデルを提示して、望ましい対話のあり方を討議する。

1 通時的反省

関大在職中から今日まで、四半世紀に及ぶ哲学対話の歴史を三期に分けて要約する。

(1) 模索期：

関大時代。公開講義「都市の風土学」に〈対話〉の導入を図ったものの、適当なモデルが見あたらず、暗中模索が続く。

(2) 試行期：

退職直前から相川オフィス時代にかけて。Ⅱ－①につづいてⅡ－②を試し、参加者が主体となる対話形式が徐々に具体化する。

(3) 確立期：

梅田への会場移転（2023 年～）を機に、「哲学講話」と「哲学対話」とを連動させる現在の形式（Ⅱ－③）が定着した。

Ⅱ 方法論的反省

実践されてきた「哲学対話」のモデル三種、それぞれの特色を要約する。

④P4C——「子供のための哲学」モデル

⑤PCAGIP——臨床心理学モデル

⑥「三人対話」——風土学モデル

⑥「三人対話」は、全体テーマ（ex. 戦争、環境問題）をめぐる「講話」と「対話」の連携によって具体化した。各方式の特質を見きわめる。

[概要]

「哲学対話」の歩みを振り返り、そのあるべき姿を参加者と論じ合い、今後の方針を決するための検討材料としたい。関大在職中の「都市の風土学」から20年余の歴史を経て、主宰者の望む対話の形式がようやく確定した。その歴史と方法を紹介して、各位の批判を仰ぐ。

1 通時的反省

教師時代から追究してきた〈対話〉の理念。当初は、風土学の理論に含まれていなかった対話が、やがて理論に取り込まれ、最終的に理論と実践が一致するに至った。

○模索期：関大時代。「都市の風土学」（公開）講義後に質疑応答の時間をとったものの、教室は一種の〈権力空間〉。教師と受講者との〈あいだ〉を開く試みは、不発に終わった。当時まだ「哲学対話」の理念は存在せず、参照できるモデルもなかった。

○試行期：退職前年から、民間施設やアパートを拠点として「木岡哲学対話の会」を開催。当初は公開講義の延長だったが、全国的に拡がり始めた「哲学対話」「哲学カフェ」を参考にして、参加者中心の対話に切り替わっていった。

○確立期：梅田への会場移転（2023年～）を機に、「哲学講話」と「哲学対話」とを連動させるシステム（Ⅱ－㉔）を考えつき、(a)哲学（風土学）の教授、(b)開かれた対話、の両立が実現したことにより、継続的発展的な「哲学対話」の型が完成した。

Ⅱ 方法論的反省

第二期以後、試行された哲学対話の方法は三種。それぞれの利点、特徴を挙げる。

④P4C（Philosophy for Children）——「子供のための哲学」モデル。「哲学カフェ」の標準版。ハワイ大学で開発された哲学対話の方式を直輸入。参加者がたがいの合意によってテーマを決め、他から規制・指導を受けることなく、自由に意見を発表する〈自由空間〉を実現。主宰者は、討論に参加することなく、〈対話の場〉の管理運営に徹する。

⑤PCAGIP（Person-Centered Approach Group Incident Process）——臨床心理学モデル。心理臨床の現場で、主に「対人援助職」の専門家に対して行われる集団カウンセリングの手法。「事例報告」に接する参加者が、順に報告者と一問一答を重ねる中で、報告者自身が「気づき」に至るというもの。発言に対する圧力を除去するマナーは、④と共通。

⑥「三人対話」——風土学モデル。〈主宰者－発表者－参加者〉の関係を、〈私－汝－彼〉の

三者による開かれた対話の型として設定。「哲学講話」と「哲学対話」の連携は、〈私一汝〉の二人対話。そこに他の参加者が、〈彼〉として加わることによって、「三人対話」となる。全員が哲学的テーマを共有して、継続的・発展的に対話を続けることで、単発性・特殊性に流れがちな④⑤の弱点を補うことが可能である。風土学の理論形成、研究成果の社会的還元という自身の目的に合致することから、主宰者にとって最有力の現行モデルとなっている。

以上三種、どの方法にも一長一短がある。いずれか一つに絞り込むよりも、参加者の立場・意向に沿って、適宜選択されることが望ましく、折衷方式も可。それぞれの短所を克服し、長所を活かすような工夫が、あってしかるべきと考える。